

# 文末詞「の」が聞き手の記憶に与える影響：関係性構築の観点から

伊東昌子（常磐大学）

## 問題

本研究では、談話場における特定言語要素の使用が、メッセージの送り手や内容に対する受け手の関わり感を変動させることに着目し、その一例として、文末詞「の」が受け手の認知情報処理に与える影響を検討した。

談話場とは、基本的には知り合いではあるがその関係の粗密さが異なる複数の個人が集う場である。メッセージの送り手と受け手は固定されておらず、状況的に引き起こされる持続的あるいは断続的な相互行為が認められる。対面場面だけではなく、**Social Network Service** が提供する場も含まれる。

談話場において人と人がメッセージを交わすとき、その送り手や内容に対して受け手が常に興味を抱いているとは限らない。表現中の複数の手がかりにより、受け手は関わり感を持って聞くようになったり、特定の内容を記憶に留めたり、それに基づく言語行為を行うなどして、予期せぬ相互行為（**Goffman, 1981**）へと発展する場合が少なくない。このような談話場における受け手の態度や発言はメッセージの送り手に影響を与え、現行の相互行為の持続や楽しさ、さらには将来的な意味ならびに関係の構築に変化をもたらす。

伊東・永田（2007）は文末詞が談話場における相互行為を構築する働きに着目し、文末詞「の」の基本機能を分析すると共に、その使用が受け手に与える影響を検討した。文末詞「の」の基本機能としては、現メッセージの背景となる先行状況と現状の蓋然性に送り手がどうコミットしているかを曖昧にしたままメッセージを終了させる。言い換えればメッセージの受け手は未完の意図を手渡されたように感じると推察され、その作用がぎゅくに受け手に状況的な関わり感を惹起させると予想された。関わり感とは、談話場への

参加感を抱いたり、聞く姿勢になったり（注意が向く）といった認知状況である。

伊東・永田（2007）は宣言文とその末尾に文末詞「の」を付加した文が受け手に与える印象を比較した。その結果、文末詞「の」が付加されると、受け手は開かれた談話場と送り手の相互行為意図を感知し、さらに談話への関わり感が生じた。文末詞「の」の使用は、メッセージの送り手とその内容へ受け手の状況的注意を向けさせるように働く。それではこの働きは、受け手の認知情報処理にはどう影響するのであろうか。

受け手の認知状況とメッセージの情報処理の関係に関しては、メッセージの受け手（文章の読み手）に特定職業の視点を持たせた場合、その視点に合致した内容の理解や記憶が促進されるとの報告がある（**Pichert & Anderson, 1977**）。また、現在の感情と一致する内容がよりよく記憶保持される感情一致効果も示されてきた（**Bower, Gilligan, & Monteiro, 1981; Erlichman & Halpern, 1988**）。しかし文末詞の使用によって引き起こされる状況的な関わり感が、メッセージの記憶や理解といった認知情報処理に及ぼす影響は明らかではない。

文末詞「の」の使用により、受け手の関わり感が局所的に生じて注意が向くのであれば、そのメッセージ内容の記憶は促進される可能性がある。局所的な関わり感の如何により、受け手の記憶に残る情報が異なるとすれば、さらにその情報が受け手のその後の言語行為に影響するのであれば、相互行為の連鎖の過程で偶発的な意味の共同構築があつたり、関係性が新たに創出されたりすると期待される。

以上を考慮して、本研究では文末詞「の」の使用が記憶に与える影響を検討した。

仮説：文末詞「の」は、送り手のメッセージに

対する受け手の関わり感を引き起こす機能を持つことから、その内容の記憶が促進される。

## 実験 1

伊東・永田 (2007) における文章を用いて、文末詞「の」が記憶に与える影響を、記憶と理解への影響を区別する方法を用いて検討した<sup>1)</sup>。

### 方法

**刺激材料** **刺激文** 女子大生A子の一日を綴った文章 (表 1) で、8つの宣言文から構成される文章A (371字) と、各文に文末詞「の」を付加した文から構成される文章B (379字) である。**記憶問題** 提示された文節に対し「その表現があった」「ちょっと違うがそのような表現があった」「その表現はなかった」のいずれかを答える問題 12 問。**理解問題** 部分的内容の記述に対し、「そういう内容だった」「文章内容からそう推測できる」「文章内容からは判断できない」「文章内容とは違っている」のいずれかで答える問題 10 問。**参加者** 大学生男女 66 名であり、宣言文条件と文末詞付加条件に同数を配した。

**手続き** 講義授業を利用した。表紙、刺激文、クレペリン課題、記憶問題、理解問題を別ページに綴じた冊子を配布した。刺激文の読みの時間は 2 分間とした。まず一読させ、次に静かに発話しながら何度も読むように教示した。この教示は文面を目で追うのみではなく、口調を確かめながら読ませるために行った。読みを終了した後は 1 分間のクレペリン課題、記憶テスト 2 分間、理解テ

表 1 刺激文:宣言文と文末詞付加文 (○に「の」が付加されている)

朝起きて、新聞を取り上げ、まずはテレビ欄、つぎに社会面をみて、興味ある記事を拾い読みした○。コラムと最近面白くなった国際情勢面、それに社説を読んで、深夜に予約録画しておいたトーク番組を再生しながら朝食をとった○。  
2時間目の専門科目の講義に間に合うように電車で飛び乗って、読みかきの黒川三郎の小説の世界に入った○。  
生協での昼食の後で、友人のB子と図書館に入り込み、4限目のゼミ発表のネタ本探しをして、読み合わせをして、重要な部分をノートに写し取った○。無事に発表を終えて、急いでバイト先の家庭教師宅へ行った○。そこで、中2の子に「先生、インターネットって何のこと？」と聞かれて、今朝仕入れた新聞の記事を受け売りした○。  
帰宅後に夕食を自炊して、テレビを見ながらゆっくり食事をした○。その後は、久々に教員採用試験用の問題集に取り組み、快く疲れて眠りについた○。

スト 2 分間という順に行った。

### 結果

**記憶テスト** 宣言文条件と文末詞付加文条件の平均得点 (*SD*) は、それぞれ女子 7.60 (1.73) 男子 7.15 (1.28) と女子 7.94 (1.52) 男子 8.38 (1.50) であった。刺激文条件と性差を要因とする分散分析を行った結果、刺激文条件の主効果が認められた ( $F=4.14, p<.05$ )。

**理解テスト** 宣言文条件と文末詞付加文条件の平均得点 (*SD*) は、女子 6.23 (1.36) 男子 6.46 (1.55) と女子 6.41 (1.70) 男子 6.38 (1.31) であり、刺激文条件と性差を要因とする分散分析を行ったが、主効果も交互作用も認められなかった。

実験 1 の結果は、文末詞の使用が理解ではなく記憶に影響を与えることを示したが、すべての宣言文の文末に「の」を付加したため、文章としての違和感があったことは否めない。この点が記憶に影響を及ぼした可能性がある。さらに、より重要な事項としては、文末詞「の」が局所的に受け手に関わり感を抱かせるならば、文末詞「の」を付加した内容が記憶に留まりやすいことを示す必要がある。この点を実験 2 において検討した。

## 実験 2

文末詞「の」の使用が局所的に記憶を促進するか否かを明らかにするため、脈絡のない複数の文に任意に文末詞「の」を付加し、その使用が直後再生と遅延再生に与える影響を検討した。

### 方法

**刺激材料** 「～を～したい」という短文である。動詞から連想される目的語が一意に決まらない単語を用いて、以下に示す 20 個の刺激文を作成した。A4 のボール紙の中央に MSP ゴシック体 80 ポイントのサイズで各刺激文を印刷した。

「里を訪ねたい」「柿を食べたい」「本を売りたい」「夢を与えたい」「飴を作りたい」「鳥を飼いたい」「海を渡りたい」「窓を飾りたい」

「色を選びたい」「壁を変えたい」「森を走りたい」  
 「庭を歩きたい」「店を開きたい」「友を送りたい」  
 「足を鍛えたい」「靴を買いたい」「貝を並べたい」  
 「道を知りたい」「兄を呼びたい」「笛を習いたい」

**参加者** 大学生男女 32 名である。

**手続き** 実験演習授業（1 グループ 7 名から 10 名）を利用して実験を行い、4 グループが参加した。各刺激文の提示時間は 3 秒、提示間隔は 2 秒として、20 個の刺激文を提示した。刺激文の提示は、実験者が刺激文を印刷した用紙を見せながらその文を読み上げる形式で行った。文末詞付加文に関しては、口頭でのみ「の」を付加して読み上げた。読み上げ方に関しては強調や長音にならず平坦なイントネーションで付加した。視覚的に提示される刺激文は全て宣言文である。刺激文提示の前に 3 試行の練習を行った。参加者は「これから示す複数の文はある女子大生の願望を表している。文末に付加される助詞は気にせず、文の内容をよく記憶するように」と教示された。

**刺激文の提示形態と順序**

宣言文と文末詞付加文は 2 連を許し、かつ最初あるいは最後のいずれかが文末詞付加文である以外は、任意に提示順を決めた。提示順については、系列の 1 番目に文末詞付加文が出現する A タイプと宣言文が出現する B タイプを用いた。また、刺激文自体の順序は参加者グループ毎にランダム化した。したがって、例えば A タイプのグループでは文末詞付加文と宣言文の出現順序は同じだが、文末詞が付加される刺激文はグループ毎に異なる。

**記憶テスト** 直後自由再生と 1 週間後の遅延再生を行った。再生時間は 5 分である。なお遅延再生に関しては 1 名の参加者が欠席したため、31 名のデータを分析対象とした。

**結果**

**直後再生** 平均正再生率 (SD) の算出に関し、系列位置曲線における初頭効果と新近性効果を考慮して、系列位置 3 番から 18 番までのデータに関して処理を行った。宣言文と文末詞付加文の平均再生率は、女子.42 (.48) 男子.41 (.47) と女子.56 (.48) 男子.49 (.48) であった。刺激文形態と性差を要因とする分散分析を行った結果、刺激文形態の主効果が認められた ( $F=5.35, p<.05$ )。

刺激文形態の提示順に関し A タイプと B タイプの系列位置曲線を図 1 に示す。系列位置曲線の一般的な傾向としては U 字曲線を描き、中央部の再生率が低下することが知られている (Glanzer & Cunitz, 1966)。しかし、提示順のタイプにかかわらず、文末詞「の」を付加した場合は、記憶に留まる確率が概して高い。

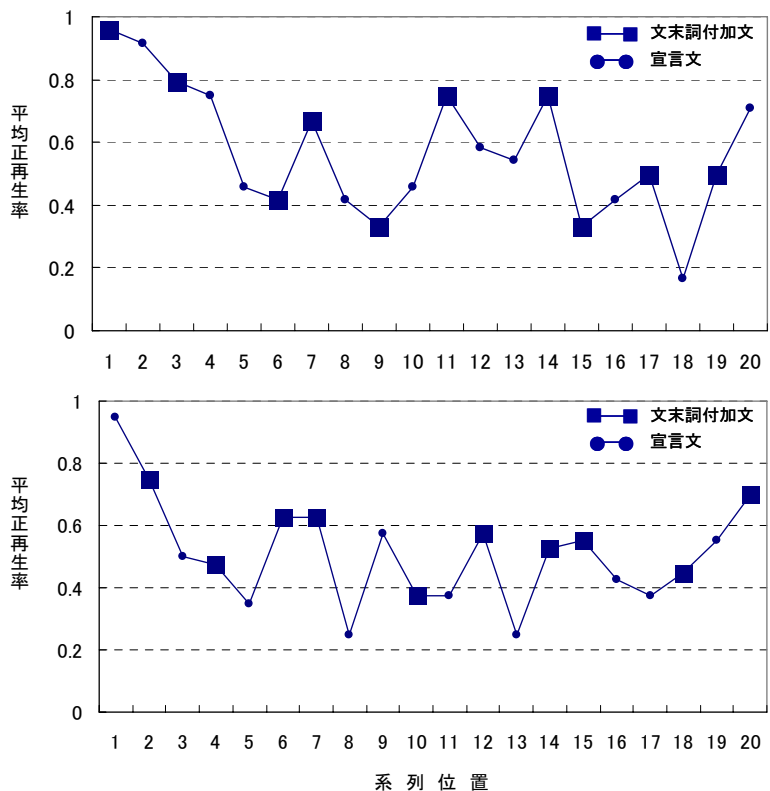


図1 直後再生 タイプA(上段)とタイプB(下段)の系列位置曲線

遅延再生 直後再生と場合と同様に系列位置3番から18番までを対象として処理を行った。宣言文と文末詞付加文の平均正再生率は、それぞれ女子.23 (.41) 男子.16 (.33) と女子.34 (.46) 男子.15 (.34) であった。刺激文形態と性差を要因とする分散分析を行った結果、性差の主効果のみ認められた。 $(F=10.56, p<.01)$ 。この結果に基づき、女子の正再生率にのみ着目して  $t$  検定をおこなったところ、刺激文形態による差が認められた ( $t=2.34, p<.05$ )。1週間後であっても、女子は文末詞「の」を付加して読み上げられた刺激文をよりよく保持していた。

### 考察

本研究では文末詞「の」の使用がメッセージの受け手に送り手の相互作用意図を知覚させ、さらに関わり感を抱く認知状況を生じさせる機能に着目し、その使用が記憶に与える影響を検討した。実験1と実験2の結果から、文末詞「の」はそれが付加された言語メッセージの記憶を促進することが示された。しかし、文末詞「の」が受け手の関わり感を生じさせたために記憶が促進されたか否かについては、さらに検討が必要である。本研究では、文末詞の付加は音声のみで行ったが、視覚刺激と音声刺激を一致させた刺激、あるいは文字による刺激のみを用いて再検討する必要がある。

さらなる検討は必要ではあるが、メッセージの受け手の関わり感が文末詞「の」によって変動し、それに伴って記憶やその後の言語行為が影響を受けるならば、複数の個人が集う談話場において使用される文末詞「の」は、送り手と受け手の偶発的で通時的な関係性構築や意味の構成に影響を与えることになる。

従来、主要な文末詞は終助詞として研究され、広辞苑(1989)では「文や句の終りについて、疑問、禁止、詠嘆、感動などの意を表す助詞」と説明されてきた。すなわちメッセージを発した個人の心情を暗示しつつそのメッセージの終りを示

すものとして長く理解されてきた。しかし、文末詞がメッセージの受け手の関わり感に影響を与え、それが局所的な認知情報処理にも影響するならば、文末詞はメッセージの受け手の注意を特定命題へ誘い、その後の相互行為へとつなぐ働きを言語実践の場で発現させる言語要素である。

今後は、文末詞「の」の働きをさらに検討すると共に、関係性構築に関わる環境手がかりとしての言語要素とその影響を解明していきたい。

†1 実験1は日本認知科学会第21回において発表した内容ではあるが、新たな理論的枠組みによる統一的な説明のために掲載した。

### 引用文献

- Bower, G. H., Gilligan, S. G., & Monteiro, K. P. (1981). Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental Psychology: General*, **110**, 451-473.
- Erllichman, H. & Halpern, J. N. (1988). Affect and memory: Effects of pleasant and unpleasant odors on retrieval of happy and unhappy memories. *Journal of Personality and social Psychology*, **55**, 769-779.
- Glanzer, M. & Cunitz, A. R. (1966). Two storage mechanisms in free recall. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **5**, 351-360.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- 伊東昌子・永田良太 (2007). 談話場における相互行為の構築に関わる文末詞の修辞機能. *認知科学*, **14**, 282-291.
- 新村出(編)(1998). *広辞苑 第五版* 岩波書店
- Pichert, J. W. and Anderson, R. C. 1977 taking different perspectives on a story. *Journal of Educational Psychology*, **69**, 309-315.